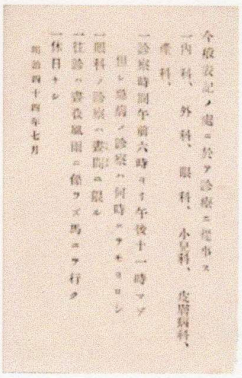
随筆

桑名にあった浅井平一郎医師の浅井病院

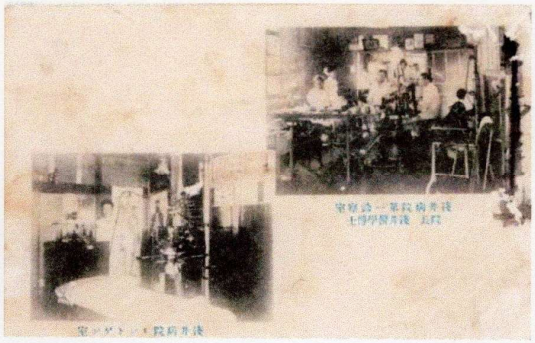
飯　田　良　樹（久居一志地区）

古書店で以前、三重県桑名郡額田・私立浅井病院・新築第７病室の絵葉書を買っていた。

第７病室を新築されるとは桑名に大きな病院があったんだなと思っていたら、最近、明治時代の郵便広告状と昭和の写真を入手した。



郵便広告状は明治44年７月となっているので、医院時代のもので、在良村額田となっている。面白いのは電信略号「アサ」または「ア」と電話普及前を思わせる。診療内容は内科・外科・眼科・小児科・皮膚科・産科と多岐にわたって標榜されておられ、診療時間は午前６時から午後11時と早朝から夜遅くまで休日なしに働いておられる。眼科は昼間に限り、往診は昼夜風雨に関わらず馬にて行くと記載されている。



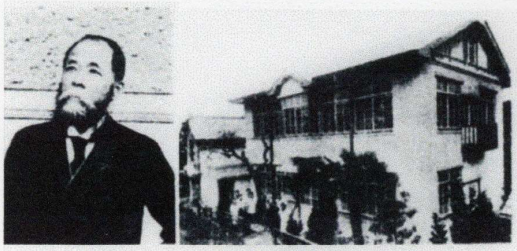
写真はレントゲン室、第一診察室で浅井院長が診察されている。写真が小さいのでお顔は不明。

だんだんと興味が湧いてきたので、ネット検索をすると三重県史編纂室「歴史の情報蔵」に浅井平一郎医師の事が掲載されているのをみつけた。

以下「歴史の情報蔵」をまとめると、

【浅井平一郎医師は、桑名郡額田村の元桑名藩士の家に第一子として生まれた。高等小学校を卒業した年の明治29年？に朝明郡川北村（現四日市市）の丹波修治先生から漢学を始め諸種の学業を授けられた。丹波先生は植物を愛し珍草を集めて娯みとされ、その高尚にして優雅な趣味に尠からぬ感化を受、附近の山野を漁って植物を得、是をおし葉として丁寧に処理し、そして主宰された嘗百交友社博物会の開催毎に出品したと『三重博物会報』に記載されている。その後、医学を志し、医師試験に合格。軍医を志願し海外に行っても、植物を採集しては丹波先生に送ることを忘れなかった。桑名郡に戻ってからも、病院を経営するかたわら、シダ類採集に熱中するようになる。やがて、員弁郡治田村（現北勢町）の甘露寺住職 多田俊学や四日市市の川崎光次郎、さらに名古屋の梅村甚太郎・右左見直八・鈴木釘次郎らとも交流し、採集の活動範囲や見識を広めた。昭和４年２月、「植物採蒐の生活には常になくてはならぬ無心の伴奏者」であった夫人が逝去され、「妻の形見なる」

標本類の県への寄贈によって、翌年春に三重県知事表彰を受けた。この表彰が三重博物会の開催の一つのきっかけとなる。それは、寄贈標本類の整理を助けた鈴木釘次郎をはじめ同好の諸氏を招いて祝宴を開き、その席上において、わが多年宿望した所の植物の会を提唱し、多くの賛同を得る。昭和５年６月13日に発起人会を自分の病院で開催し、三博物会々規や将来の事業の打合わせを行い、「三重博物会」を誕生させた。同年７月に第一回博物陳列会、翌年11月に第二回博物陳列会と植物に関する座談会を開催する。この第二回博物陳列会は、多くの出品があり、浅井病院の建物五棟が当てられた。大正から昭和初期にかけては、県下でも三重博物会のほかに、伊賀植物同好会・四日市植物同好会・中勢博物同好会、宇治山田理科学会・神都理科学会・尾鷲郷土博物同好会・熊野博物同好会などの多数の動植物等の研究会や同好会が発足し活躍した時期でもある。】と結んでいる。



長院病井淺　　宇本標物博ト郷一ノ室病院病井淺

また、『人物月旦』昭和８年発行（伊勢新聞社桑名支局）によると、

【眼科専門医師、植物蒐集家、従７位勲５等。明治13年５月１日生まれ、明治37年医学試験合格、軍医となり、その後、故郷に病院を設立し、眼科医をつとめるかたわら、丹波修治、梅村甚太郎らの指導をうけ、植物の採取や栽培をおこなう。昭和５年三重博物会を設立し、地域の動植物や鉱物の研究につくした。娘さんは同村で歯科を開業。】

先生の写真は、髭を蓄えられて如何にも昔のお医者さん。私が若い時に愛読した『医者ともあろうものが』の見川鯛山先生を思い出した。建物の写真は病院一部と博物標本室となっている。

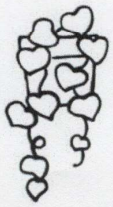
ヤフオクでも最近出品された写真を落札できた。この表記にも附属植物陳列場となっている。本当に植物が好きであったのがうかがえる。

国会図書館デジタルアーカイブで検索すると、植物研究発表だけではなく、『眼科臨床医報』『医学中央雑誌』『中外医事新報』『実験眼科雑誌』などへ眼科医として投稿されている。昭和34年３月10日死去、78歳。

浅井平一郎自画像
（「丹波修治先生傳」より）

三重県史編纂室「歴史の情報蔵」
（https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/rekishi/）より

調べている内に、NHK朝ドラ笠置シズ子の「ブギウギ」の前に放映された「らんまん」の牧野富太郎を思い出した。

三重県には医者であり、植物研究大家がいたのだと知った。

世の中知らない事だらけ、もっと勉強をとの思いである。